



コミュニティの保護者たちは、プロジェクトが行う研修を修了すると、佐藤さんから修了証が手渡される

## 神様がNAOEを 運んでくれた

ジェンダーやマイノリティーをテーマに日本やアメリカで研究生活を送っていた佐藤真江さんが、一転して、国際協力のゲンバに飛び込んだのは2000年のこと。青年海外協力隊員としてドミニカ共和国中部のヤマサという村で村落開発に携わったのだ。

「厳しい開発途上国の現実を知って、人々に寄り添ってみたい」

そんな思いで飛び込んだゲンバだったが、そこでの体験は、生活環境の厳しさなどから「人生観を180度変えてしまうような日々」だったと言う。しかも、活動は計画通りに進まない。現地スタッフの家族や子どもの問題、間違いや失敗の数々…。現地の人々の生活にどっぷりと浸かり、涙あり、笑いあり、ときには怒りありの中で活動は進んでいった。

達成感を覚えたのは、2年間の任期が終わりに近づいたころだ。村の人々と一緒に改良かまどを作った。土の上に置いた石に鍋をかけるだけのかまどから、熱効率の良いかまどに改良することで、特に女性たちの暮らしが大幅に変わった。時間にゆとりが出る。料理を作るのも楽しい。後任隊員の努力もあって、100台以上の改良かまどが村に広がっていった。

「国際協力のテーマは、日々の暮らしの中に埋もれています。今何が必要とされているのか、人々の思いを感じ、共感する力が必要だと強く思いました」

その時、村の女性が掛けてくれた言葉を、佐藤さんは今も忘れない。「神様がNAOEを運んでくれた」

厳しい途上国の現実に、心から達成感を感じた瞬間だった。

## 犯罪や暴力を 未然に防ぐために

現在、佐藤さんは同じ中米のニカラグアで、JICAが実施する「青少年とその家族のための市民安全ネ

## JICA専門家 Sato Naoe 佐藤 真江さん



プロジェクトのスタッフたちと手工芸の作品について話し合う佐藤さん

ットワーク強化プロジェクト」の専門家として活動している。目的は、首都マナグアのスラムで、青少年犯罪や子どもに対する暴力を防ぎ、住みやすい社会をつくっていくことだ。

プロジェクトではまず地域のリーダーを養成し、地域が一体となって犯罪や暴力を予防していくことの重要性を彼らから父母に伝えていく。また、青少年と保護者の生涯学習活動として手工芸教室なども開催。現金収入を得て、貧困からの脱却を手助けするためでもある。さらには、青少年の健全な成長を促すことを目的としたレクリエーション、地域内の警察、学校、保健所と連携して、暴力問題が起こった時の通報システムをつくるなどといった活動も行っている。

こうした取り組みを通して、これまで犯罪から身を守ることにのみが重視されていたスラムに「地域ぐるみで犯罪を未然に防ぐ取り組みが必要だと考える人」が増えてきた。見え始めた成果に、現地スタッフのモチベーションも高まり、佐藤さんは確かな手応えを感じている。「スラムでの生活はとて厳しいです。それでも、バラック小屋の庭先で日が暮れるまで講座を開き、暑い中、子どもたちのためにボランティアで活動をし

ている住民を前にすると、今、地域の人々が本当に強いはずなでつながっていているのだと、心を打たれます。人と人との結び付きは、人と人がただつながるだけでなく、心という人だけが持つ尊い価値がある。そこ成り立つものだを教えてもらっている気がします」

そして心は「感動で動く」と佐藤さんは言う。

佐藤さんはある日、スラムに住むおばあさんからビーズでできた手作りのピアスをプレゼントされた。彼女は、プロジェクトで開いた手工芸教室でスキルを学び、今では、それを生かして現金収入を得ている。「学ぶことは永遠に終わらないのよ」

「おばあさんのこの言葉に、私は感動と勇気ももらいました。私もまた、これから先、いろいろな経験の中で学んでいきたいと思えます」

佐藤さんの変わるこののないテーマは、子どもが抱える問題を社会全体で解決していく仕組みづくりだ。

「そのためには、人々との心からのコミュニケーションは欠かせないと考えています。いつも心を開いて人々に接し、胸を打たれたことはすぐに相手に伝えていきたい。私の感動が伝わり、共鳴して、やがて大きなうねりとなるに違いないと信じているんです」 (19ページに関連記事)



さとう・なおえ

1970年静岡県出身。カリフォルニア大学デービス校、富山大学大学院、名古屋大学国際開発研究課博士課程修了。2000～02年、青年海外協力隊・村落開発普及員としてドミニカ共和国で活動。02年よりJICAジュニア専門員、ニカラグア事務所の企画調査員を経て、07年7月より現職。

## 「感動する力が、人の心を動かしている」

開発途上国のコミュニティが抱える問題に取り組む佐藤真江さん。

最も大切にしていることは「地域の人々への共感」。

2000年以来、中米を舞台に、ゲンバのさまざまな課題に挑戦し続けている。

第14回

## ゲンバの風

